

「東京防災」・「東京くらし防災」編集・検討委員会

(第2回)

議 事 録

令和5年4月19日(水)

第一本庁舎9階 会議室

午前 10 時開会

○中林委員長 それでは、全員そろいましたので、第二回「東京防災」・「東京くらし防災」編集・検討委員会を始めたいと思います。

進行については、第一回に引き続き、中林のほうで進めさせていただきたいと思います。それでは、委員会を進めるにあたっての注意事項を説明します。この会議は非公開で実施いたしますので、どうぞ忌憚のないご意見をお願いいたします。

また、委員会は、防災ブックのリニューアルに関して助言を行うものであります。頂いたご意見のすべてを反映できない場合もありますのでご了承ください。

それでは、次第にしたがって、本日の議題である、「防災ブックのリニューアルのコンセプトを踏まえた構成案」についてのディスカッションに移りたいと思いますが、それに先立って事務局より論点等、資料の説明をお願いしたいと思います。

○事務局 事務局より、第一回で皆様から頂いたご意見をふまえて、防災ブックのたたき台を作成しておりますので、ご説明をさせていただきます。お手元の資料、もしくは、前のスライドにも映しておりますのでご覧ください。

まずは、資料1をご覧ください。こちらは、第一回の委員会の後、3月に委員の皆様には個別にご説明させていただきましたが、それぞれの防災ブックのコンセプトでございます。「東京くらし防災」につきましては、多様な立場に立って、都民の日常の暮らしでの「行動」につなげるもの、ということで、イメージとしては「0から始めて1」というような、最低限の行動のベースを作るものというふうに位置付けております。一方で、「東京防災」につきましては、災害への備えをより万全にするために、都民の「知識」の定着を促すものと言うことで、イメージとしては「ベースの1から、万全を10とすると、それに向けて読み進めるもの」と、整理しております。

続いて、資料2をご覧ください。こちらは、防災ブックのコンセプトを踏まえて、今回の構成案のポイントを整理したものでございます。この後に続く、事前の説明でもお送りした資料2-1や2-2、もしくは事前にお送りしております詳細な資料で現段階でのたたき台を別途、お示ししているところがございますけれども、まずは、全体の構成のポイントをご説明できればと思っております。

まず、両ブックに共通する構成として、記載内容は、「なるべく分かりやすくしよう」ということで、わかりやすく記載した上で、詳細な情報を、QRコードを活用してデジタルページに誘導することや、防災行動を時系列に記載して、想像し易いシミュレーションを提示することなど、頂いたご意見を踏まえて、四点ほど記載をしているところでございます。

次に、各ブックの特徴について、「東京くらし防災」につきましては、都民が日常で取り組むべき防災行動に、優先順位をつけて記載をすることや、発災前後の各シーンで、誰もが必要な取組・行動に加え、個人の特性等に応じた多様な視点で記載をすること、また、災害を自分事として捉えられるよう、マイリスクの書き込みができるページを設けることなどをポイントとしてございます。一方で、「東京防災」につきましては、関東大震災から 100

年の経験や被害想定に基づくシナリオを紹介すること、また災害種別ごとに必要な備えとアクションについて、最新知識を踏まえて網羅的に記載すること、また、辞書的役割として寄与するため、防災に役立つ知識や用語解説を掲載することなどをポイントしております。

なお、各ブックの分量につきましては、「東京くらし防災」に記載する内容は必要最低限のものである、ということを中心とし、だいたい180ページ以内で構成が出来ればと想定しており、「東京防災」につきましては、現行と同じ300ページ程度を想定しています。

以上を踏まえて、お手元にあります、資料2-1が、「東京くらし防災」の構成案の概要です。2ページにかけて示しております。そして、資料2-2が、「東京防災」の構成案です。さらに、より詳しいイメージとして、お手元の細かいエクセルシートがございます。これらを参考にしていただきながら、構成の順序や、論点などについて、ぜひご意見を頂戴できればと考えております。

事務局からの説明は以上でございます。

○中林委員長 ありがとうございます。では、残りの時間は、皆様のご意見を頂くこととなります。みなさまいかがでしょうか。

順番にお伺いしていきますね。まず、私の方から。

私はいいなと思うのですが、「東京防災」の二つ目の項目に、「家庭だけではなく」とあり、要するにファミリー単位で防災を考えるという記載なのですが、ここ以外はすべて、「都民が」とか、「ひとりひとりが」となっています。基本的に「東京防災」にある形の防災に取り組む単位について、東京都がイメージしている防災主体の単位というのは、一人一人なのですか？それとも、世帯も今、多様化しているので単純にはいかないのですが、標準的な核家族世帯、子供がいて親がいる世帯などですか。そのあたりをどのように設定するかで、何となく、書きぶりが変わってくるのではないかなという気がしています。それは、実は「東京くらし防災」の二番目にある多様な方という部分も、「一人一人の多様」ということだけをここで書いていくのか、「こういう方がおられる家庭では」ということを前提にしているのか。スタディをしていただくためのテキストとして、そのあたりの焦点の当て方は、どうなのかなというのが気になっています。それは、エクセルシートの細かい表を見ても、読めないのですよね。家庭での防災と言いつつ、「ひとりひとり」という記載もたくさん出てくるのですが、例えば、私のところと言うと、高齢者二人世帯。近所に息子たちがいますが、私が見る場合、「高齢者二人世帯として、何をやったらいいのかな」という目で見ようとする。そうすると、まず、高齢者のところを見てみて、それで二人なので、該当ページを見ていくということになると思うのです。子育て世代で、小さい子供がいる家庭だと、そのお母さん、お父さんの問題を、ひとりひとりの問題とみて、そして、子供の問題というのを見て、それをどこかで、構成して「我が家の防災とは、こういうことなのだ」と理解していくのか、そのあたりをもう少し考えておかないといけな。この新しい防災ブックを、どのようなコンセプトで示し、受け取る側にとって一番コンパクトにわかりやすく、マイ防災として受け取ってもらえるようにするか。百科事典というのは、確かに調べようとする際には

使いやすいのですが、実際に何かしようと思うと、もう細かすぎて使いこなせない。そうならないようにしないといけないのではないかな。これで言うと、「東京くらし防災」の後ろの方にマイリスクストーリーだとか、マイタイムラインだとかがありますが、これを「家族単位で考えるのか」とか。一人世帯なら、一人ですが。ここに集約するとすれば、「東京防災」の方は、やや百科事典でもいいのかもしれないのですが、そこから拾い出したものを落とし込んでいって、それで、「我が家の防災というのは、このような課題があって、この辺がまだできていない」「この辺は取り組んだので次はこの取組をやろう」というような形で進めていけるように。そのような形で、「東京くらし防災」と「東京防災」の役割を明確にすること。それと、単身世帯も多いのですが、家庭で一番多いのは家族だと思っていて、家庭でマイ防災として落とし込める。そういう意味では、「東京くらし防災」の一番後ろに作っている、災害を自分事として捉えようというところ、すごく大事だと思います。

これをしっかりと捉えていただけると、防災として、「何をやっていくべきなのか、何をやるのが大切なのか」ということに、自分事として気づいていける。その方が役に立つ本になるのかなと、全体を見て感じました。二冊は、「東京防災」、「東京くらし防災」の順番で出版しましたが、今回、ガッチャンコするので、そういう意味では、この辺の使い方について、役割を明確にする必要がある。「東京くらし防災」を見ながら「東京防災」を見て、あるいは「東京防災」を見て学んだことを「東京くらし防災」の方にきちんと書き込むなり、理解するなりして。受け皿を「東京防災」でしっかりと作ってあげることが大事かなと思います。全体のイメージとしてはそこが大事かなと思いました。

もう一点は、災害種別のことなのですが、地震、風水害という各種災害があるのだけど、地震というのは何をイメージしているのかな？項目だけ見ていくと、揺れ対策のことを非常に強くイメージしていて。100年前の関東大震災の105,000人の90%以上は火災で死んでいます。今回の被害想定でも、6,100人のうち、4割程度が火災で亡くなる想定です。「地震火災に対してどう命を守るか」「命が助かるために」ということについて、地震火災から身を守ることこそ東京らしい防災の大きな課題なのではないかなと思います。そして、広域避難計画では、区部の人にとっては、「どこへでも避難していい」というわけではありません。「あなたの住んでいる場所からすると、避難場所はここです」という指定を東京都がしています。それから、「ここは木造が密集してないので、避難場所などはありません、避難せずに地域にとどまってください」という場所があることも東京都が設定していますが、そうしたことをきちんと捉えてもらわなければいけないので、東京の防災の最大の特徴である地震火災について、やはりもう少しきちんと書くのがいいのではないかなと。「東京防災」が全国に売れた理由として、(東京の特徴である)地震火災についての記載がない、つまり、地震火災以外の防災の本だったためです。前は、地図をつけて各区市町村に配ったのですが、今回は(地図を)つけないということであれば、なおさら地震火災を含めて、避難が非常に多様化してしまっているの、このような部分がしっかりと学んでいただけるような構成にしなければいけないのではないかな、と思いました。

大きな話としてはその二つです。

細かいことも含めて皆さんからご意見いただきたいと思います。

○鈴木委員 今の中林先生の話しを踏まえて、まず、コンセプトについてお話をしたいです。最初、第一回委員会の報告として、事務局がお越しいただいたときにも話したのですが、この資料1の0➡1、1➡10という意味がやはりすごくわかりづらくて。「東京防災」は辞書的ですよという話で、「東京くらし防災」は0➡1、最初の一步という話になっていますが、僕の専門分野からすると、まさにここ(多様性)のところの細かい知識が結構必要で、中林先生が今話された、辞書的な「東京防災」を見て、その後で「東京くらし防災」を見てみる。というような、細かい部分が「東京防災」の方にある、という捉え方だとすると、「東京くらし防災」がゆるくなってしまふ。「こういう人たちがいますよ」、「こういう視点がありますよ」という程度ではなくて、もう少し本当に命を救えるための個別のところを書き込む必要があるのではないのかなと思っています。そうすると、1➡10、0➡1というふうに二冊を棲み分けた点をまた振り出しに戻ってしまうような形になるという懸念もあるのですが、一回納得はしたのですが、やはりひっかかる。コンセプトを見てみて、やはり緩いというか。

一つはさっきの中林先生が話された点で言うと、誰に対するメッセージかというところ。これを手に取る時に、例えば、「障害者ですよ」「LGBTの当事者ですよ」というような、自分の項目がないとやはり見ないのですよね。そういう意味では、「あなたたちに向けている冊子ですよ」というところ。見るのは、やはり高齢者は高齢者の項目、障害者は障害者の項目、子供は子供の項目になる。

このような「当事者」に対して、どうなのかというメッセージとそのページが必要という話と、もう一つは、中林先生が話されたことと関連するのですが、自分に子供がいた場合に、子供を持つ親としてという視点で見るので、特に「東京くらし防災」とかでは、「当事者」へのメッセージと「当事者を取り巻く弱者の視点」など、障害者のケアをする人たち等、支えている人たちがどのように、これを見て何かを感じるなど、そのような記載をできるといい。そのページにLGBT、障害者、高齢者等という「当事者」向けのもの、加えて、「その当事者を支援している人たちは、こういう配慮が必要ですよ」「このようなことに注意してくださいね」のような記述が二段構えであると、より使えるものになるのかなと思います。分量が増えてしまうのではないかとかいうところがあるけど、どこまで本に書いて、どこを外部の資料に飛ばすのか、とか。QRコードを使うというような話もありますが、詳細の程度をはじめ、全体のバランスとして、「当事者向けのすごく簡単なところ」と、「内容が深いところ」というレベルが混在しているという感覚はあります。

○中林委員長 ありがとうございます。

この細かいエクセルシートは、これは本の構成として、書いているのですよね？

○事務局 そうです、本の構成というイメージで。

○中林委員長 私としては、最後の「災害を自分事として捉えよう」という部分を頭に出し

た方がいい。そして、「ここを埋めていくのだ」というイメージで以下を読んで、まず、0 ➡ 1。そして、「さらに詳しく知りたいな」という「東京くらし防災」では取りきれない時に、「東京防災」の方で調べられるようにして。ただ、「東京防災」はインデックスを作って索引をつけて、そういう個別事項からも検索できるようにしてあげる。ということが使い勝手としては大事なのかな？

エクセルシートの「東京くらし防災」の「目次」というところに、アスタリスクで「必須」と「できれば」とあるが、二つとも「1」のイメージ？「人による」というのは、まさに多様な人向けに申し上げて、間口として案内していくのだと思うが、「できれば」とここに書いてあるのが、何をどうしたいのかという趣旨が読み取れなくて。「できれば、このようなことも勉強してね」という頭出しをしている程度で、細かくは「東京防災」の方でチェックしなさい、と。自分にとって必要な「できれば」程度のことであれば、「できれば」マークは、例えば、キーワードを出して「このようなことも考えましょう」「このようなことが「東京防災」でも拾える」と。そうすると「できれば」の中身を、どんどん「東京くらし防災」に詰め込まなくてもいいなと思う。最初から「できれば」がついて中身まで解説しようとすると、0 ➡ 1、そして2、さらにそれを進めていく。と、結局どんどん「東京くらし防災」のページが増えていってしまうのですよ。

○事務局 すみません、少しだけ、補足させてください。第一回で、優先順位をつけて「最低限これだけは」というのがわかるように、という話しが出てきた点もございまして。「必須」、「できれば」、「人による」、という表現がいいのかという問題もあるのですが、「東京くらし防災」も、そうは言っても180ページほどあるので、マーク付けをして、「絶対ここはもう万人共通のところですよ」とか、「属性によっては」というところなのか、それとも「より万全に備えるためには取り組んだ方がいい」というものなのか、わかるようにする目的で、何らかの表現で優先順位をつけよう、という趣旨で記載をさせていただいております。言葉の表現自体は、検討の必要があるかなと思っています。

○中林委員長 つまり、この次の、「暮らしの中に防災どれだけ入っている」からチェック項目になってくるのだけれど、この中で、「必須」の取組と「できれば」程度の取組が入り混じっているから、それぞれの読ませ方を工夫するという意味ですか。

○事務局 そういうことです。最初に「家庭での備え」と書いているので、そこをある程度、マークを付けたりしながら読んでいくというイメージではございます。

○中林委員長 そのためには、カテゴリーなどの体系をしっかりと作らないといけないということね。「必須」「できれば」というのは、「絶対必要な基礎」と、「できればここについても考えておいてね」というその程度の違いだとすると、「ここだけは見てね」という意味でも、項目立てをきちんとしておいて、その中でまず基礎があって、「その基礎が必須になってきたら、できればこういうことも考えて」というのなら、もう少し、「東京くらし防災」に入れる中身の Kategorization をしていただいた方がよいのではないかなという気持ちです。どこでどうやったらいいのかわからなくて。私のイメージだと、マイ防災を、あるいはマイ

リスクシナリオなり、そういう我が家の防災を考えるためのテキストのフレームワークが前にあって。家族構成は、「我が家はおじいちゃんがいる、親が何歳で子供がいて孫もいます」と。そうすると、「おじいちゃんは足腰が少し悪くて、介護2です」とか。そうしたら、その人の場合は、どれを見ればいいのかというのが下にぶら下がってきて。そうすると、まず我が家の防災を考える上で、我が家はどこから見ていけばいいのかというのが整理されて。そこへまずピンポイントで入っていけるようにする、それで、詳しくは「東京防災」の方に、さらに詳しくは、QRコードで、もっと入っていけるといふ。そういう三段階みたいな形にできるといい。全世帯に、同じテキストを配るのだけど、家族属性に合わせて使い方が全然違ってくる。それを最初にしっかり意識付けしてあげた方がいいと思う。全部を読んで、やっとものが分かるのではなくて、我が家に必要なことは何なのだというのを最初に整理していただいた上で、まずそこから入っていくという。あとは、世帯が違うのだけど、息子のところには孫もいて、みたいなのも気になったら入っていけるでしょうけど、まずは各世帯。我が世帯にはどういう属性があって、何が必要で。子供も、例えば「私学で電車に乗って30分で行っているのです。これが止まったら、子供がまず帰宅困難です」みたいな話に気づくでしょうし、そういう意味で、最後にまとめではなくて、災害を自分事としていくために、まずあなたの生活を見直してくださいというのを最初に付けて。チェックしてそこに合うように（読んでいく）。そのような使い方ができるような本にした方がいい、と、思いました。

○鍵屋委員 中林先生の「家族単位で考えていこう」というのは、すごく大切にされていて、もしかしたら「東京くらし防災」というのは、ご家族とご家庭、あるいはいろいろな人が居ますけど、「東京防災」の方が、そのような部分で好都合、こちら（東京防災）の方がむしろ、地域マンションを発行する場合など、そういったさまざまな組織で、やっていく時のメインにして。

また、左側（東京くらし防災）がファーストーションで、右側（東京防災）のほうがより細かい話になったというようなイメージを持ったのですが、「東京くらし防災」の「これをやってもらいたい」という目標は、やはり我が家の防災シートみたいなものもしっかりとできるように。たぶん全く同じなのは朝、起床する、トイレに行く、顔を洗う、歯を磨く。（これらの行動は、人によって変わるものではなく）全く同じですよ。その後、起こることというのは、例えば、朝起きる、電気をつける、と仮にあったとして、「停電しているから電気がつきませんね」「朝起きてトイレに行く、断水なのでトイレが使えませんね」「その後これが必要ですよ」と。どう考えてもこれが必要ですよ。というのがあって、ある程度まずは家族の人数で、トイレの備蓄の数とかは、掛け算をして家族の人数でイコールいくつと、出てくると思うのですよね。そして、顔を洗うとなると、水が流れませんよね。そうするとウェットティッシュが必要ですよね。歯を磨くとなっても水が出ません。そうすると、洗口液で空磨きしましょう。そのようなデフォルトみたいなものがあって、プラスその家庭に必要な物は様々で、「テレビをつけようと思ったらつきません、それならラジオが必要で

す」。こういうのがある程度書きやすいように、雛形があるというか、あるいはデフォルトなので書いてしまうかという。そのようにして、目標を我が家の防災シートを作ってもらふことだ。それが例えば高齢者であれば、女性であれば、こういうところに行きます。なんとかであればこうだ、という説明が、その後に来て。そうなるこの「東京くらし防災」も捨てられないことになるというか。「これは持っていた方がいいですよ」「今あるものを、ないものだと仮定して対策をする」ということに繋がっていけばいいのかなというふうに思います。

それと、「東京防災」の方で、さっき言った組織というのは、実はマンションも企業もコミュニティも特にこの3年のコロナで、かなり防災力が弱くなっているという見立てです。事業のほとんどが、やはり経営が厳しかったというか、コロナ対策で2年半防災は後回しにします、という状況。（この点、企業としても）うちにもらったので、ここが例えば、企業が福利厚生の中で、社員の簡易トイレを買ってあげるとか、そういう防災に必要な物を買うのも福利厚生の一環であるとかいうこともできるので。やはり、東京の場合の強みは、企業の強み。企業が大企業、大きな企業がたくさんあって力もあるというのが強みなので、強みをもっと活かしてもらうような対策を、民間の方には取っていけばいい。こちら（東京防災）の方は、わが企業の防災シートとすると、やはりさすがにあまりにも対応が難しいか？それでも帰宅困難者対策とか、社員が自宅で安全に過ごせる対策みたいなのは、デフォルトでできるところだと思うので、そこがあれば読んでもらえるとか、（企業に）置いてもらえることになるのかなというふうに思います。

そういうことで、コンセプトの0⇒1、1⇒10というのは、鈴木先生がおっしゃったように、やはり違和感があるなというのはその部分でないかな。決して0⇒1が低くて、1⇒10が高いレベルではなくて。人は2/3程度は家族生活を送っているわけですから。その部分をしっかり基本とする。その後の話しとして、例えば外に出ているときもあれば、働いている時もあれば、お父さんが外で仕事をしている時もあれば、という多様性、生活の多様性で。そこでは組織で動いてもらわないと、なかなか難しいので、そのような感じなのかなと。0⇒1、1⇒10というのはやはり難しいかな。賛成しておきながら言うのは何ですが。

○中林委員長 これは0⇒1、1⇒10と書いてあるのは、まさにイメージとして言っている話だと思うので、役割としては、「二冊で深さが違う」ということであって、間口が実は同じ。

○鍵屋委員 はい、間口は同じですね。

○中林委員長 間口を作って。そのようなイメージなので180ページと300ページの差は、間口は同じなのだけど、書く分がかなり増えてくるというのが。「東京くらし防災」の方がさらっと。とりあえずこういうことも大事だよねというものを知ってもらって。そして、掘り下げはこれ（東京防災）をやりながら。必ずいつもこれ（東京防災）があって、パッと知りたいことが引き出せるように。これ、実は今探すことが、大変なのですよ。どこ

に書いてあるかが分かりにくい。絶対に、これには索引をつけるべきだと思うし、この後ろに名前、個人の属性とか家庭で今やろうとついているじゃないですか。実はこれを全部「東京くらし防災」に入れてしまっただけで、これをやりながら、とりあえず何をやるかはこちら（東京くらし防災）で見つけて。さらに深くという時に、こちら（東京防災）をしっかりと活用していきたいという。そういう理由で、どちらかがあればいいという話ではなくて。やはりこれ（東京くらし防災）があって、これ（東京防災）を活用する。そのような役割分担もはっきりさせた方がいいと思います。

○鈴木委員 現行の二冊で、似ているところもありますよね。最初の「建物が落ちて逃げる」みたいな記載は、こちら（東京防災）もこちら（東京くらし防災）もあつたりするけれど、こちら（東京防災）はいらないよね、というか、さっきの辞書的という話であれば、「東京くらし防災」の最初のところであつたりして。

○中林委員長 繰り返しになりますが、（発刊のタイミングが）ずれているのでね。最初に（東京防災）を作ったときには、私は直接関わらなくて、「一応できたから赤入れろ」と送られてきた。その時にはこれ（東京防災）一冊で全部を網羅しようとしたから、後ろにこういうの（連絡先欄等）をつけたのです。そこから3年後ぐらいにこれ（東京くらし防災）かな？これは女性目線で、という。むしろこれ（東京防災）と少し違いを出させるために、という理由で。我が家の暮らしで必要なことを知っておいてねというので、こういう我が家シートみたいなのが無いのですよ。二冊まとめてリニューアルするとしたら、こちら（東京くらし防災）で我が家の課題を出して、それをしっかりとこれ（東京防災）で学んでいくという。そのような入れ替えをしっかりとやって、目指す役割をはっきりさせるようにしないと。それぞれを変えていくのだけれど、構成は従来の構成とあまり変えませんが、だと、結局何がなんだかわからない二冊になってしまう。そこだけはしっかりと、役割分担とそれに合わせた構成を。この表紙のデザインやその他は違うにしても、役割は明確にしておいた方がいい。そういう理由で使い方というのかな？読み方としては、まずこちら（東京くらし防災）から入ってね、みたいな話で、必要なことはこちら（東京防災）で調べてください。さらに調べきれない場合には、QRコードを使って調べられるようになっています、という流れを、こちらの二冊を活用していただくために最初から思っていました。

○鈴木委員 この順番はすごく分かりやすいですよ。僕らがそういう認識をして、使い方のメッセージを発すれば、受け手がそうなるから。そうでないと、どちらをどう使っているのか、とかいう形になってしまう。

○中林委員長 他の委員の方がいかがですか。

○池上副委員長 今、おっしゃったことは同感なのですが、「東京くらし防災」の方で。自分事とするということは、とても大事だと思います。そして、自分事するというので、私がよく、都民の方とお話をして感じるのは、「ライフラインが使えなくなった時にどうするか」ということ。言われるとハッとすることですけど、（普段は）あまり考えていない。停電のときにどうするか。トイレのことをおっしゃっていましたが、水道が止まったらトイレが使

えなくなる、マンションだともっと大変、ということがいろいろあるわけですよね。そのような、具体的にこれが使えなくなった時にあなたはどのような備えをしているの？ということ、しっかりと明記してあげると自分事になりやすいのではないかな、という気がしています。具体的に書いていかないと、なかなかわからない。あまり綺麗な言葉ではなくて、本当にこのようなことで困るのだよ、ということで、コラムかなにかで「このようなことがありました」と紹介ができれば。あるいはもっと詳しく調べたかったら、QRコードを用いて「このような実例があったのだ」ということを分かるように導いてあげると、自分事としてくれるのではないかな、というふうに私は感じています。

○富川委員 いろいろありすぎて今何から話そうかなという感じなのですが、まず、コンセプトに関して言うと、家庭というようなワードがでてくるのであれば、そもそも「冊子を読む」ということがすごくハードルが高いと思うので、東京都があえて二冊冊子を送る理由というのがすごく大事かなと思うのですよ。それが本である必要性みたいなものをすごく大事にしていきたいなというところがあって。まずは読み物として、やはり魅力的であるかどうかということが、届いたときに必要なことだと思います。「東京くらし防災」を出したとき、コンセプトだと割とはっきり「女性」というターゲットがありました。多様性がもちろん入っていたにもかかわらず、委員も全員女性でしたし、色も結局はこのようなピンク。本当は、黄色にしようとか、いろいろ意見はあったのですが、たぶん、男性はそんなに読まないようなコンセプトというのがはっきりしていたので、デザインとかはいいのですが。今回もっと間口が広がるとなると、すごく曖昧になっていくのかなというのが懸念すべき点かなと思っていて。さっき委員のみなさんがおっしゃっていたように、自分に必要なかどうかということが、やはり冊子が届いた時に分からないと。たぶん私、母親の目線で言うと、冊子が届いて、「何か書け」というのが全面に出ていたら、たぶん書かないと思うのですよ。面倒くさいが先になってしまって。そのため、これが読み物として、「読むと最低限の知識が得られるよ」というのは、やはり一発でわかるものでないといけない。まずファーストコンセプトとしてそういうことが必要かなという感覚がすごくありました。そのため、「東京防災」の方は、はっきり言って詰めこめばいいと思うのですよ。インデックスとかは勿論必要だと思うのですが、たくさん知識が詰め込まれたもので全然いいと思うのですが、この「東京くらし防災」の方を、これ（東京防災）とはまた違う形で作るということであれば、こちら（東京くらし防災）にすごく注力すべきなのだろうなというのは、今後の方向性としてすごく思います。そのため、これが本である必要性をどこで持たせたらいいのだろうか。さっきからずっと考えていたのですが、家庭で共有できるようにする工夫であったり、例えばトイレに置く人が多いのだろうかとか、持ったときに、子供でも手に取れるような工夫であったりなど。ざっくりですけど、そのようなことから考えたいなというふうに思いました。

○中林委員長 ありがとうございます。確かに、「白表に書き込みなさい」だと、作る側としては楽なのだけ。でも、アンケート調査もそうで、「なにになについて自由に書いてく

ださい」というアンケート調査は、全然回収率が上がらないのです。そういう意味では〇×に加えて、他にも関係がありそうな部分を、これね、これね、これね、と、チェックしておいて、そこへ入っていけるように、とか、その辺の工夫はしないとイケないのですよ。そういう理由からも、これ（東京防災）が男防災と言われるのだけど、まさに男防災で、自分の情報を、何も書き込まないのだよね、そのため、こういうのを、もう少し書き込んでいく。

○富川委員 例えば保険の見直しとかでも、「アプリを使って、最短3分で全部わかるよ」とか、そういうキャッチフレーズが出回っているではないですか。なので、例えば本当に「これをチェックするだけでここまでできるよ」とか、まずは開かせるで、そこからやはり命の大切さだったり、火災の発生のことだったり、具体的に落とし込んでいくということが必要なのかなと思って。その工夫というのを考えていかないといけない。

○中島委員 私 はみなさんのような防災の専門家ではないので、本の作り方というところからの意見になるのですが、今委員の皆さんから挙げていただいたのですが、前回も話したように、棲み分けを明らかにすることが、やはりすごく大事なことだと思います。この二冊ができた経緯も、「これ（東京防災）が出ました、これ（東京くらし防災）は女性目線で出ました」という流れ。それぞれ、一冊で完結できるように、ということを前提に作られているものなので、やはり全面的に二冊を一緒に変えるのであれば、コンテンツの見直し、棲み分けをした方が良くと思います。そして、今のお話を聞いた中で分けられるとしたら、こちら（東京くらし防災）を「個人」にして、こちら（東京防災）を「社会」です、みたいなやり方が一つ。後は、「今あることの延長」として一つ、「新たな知識」として一つ作る。どちらに何が書いてあるか？今皆さんから見ている、私たちが読んでいても、これをどうしていこうかなと混乱するので、そういう方に話が交錯していくのかなと思うのですよね。なので、あと届いた時、どちらから読むかということが、パッとわかるようにする、ということはすごく大事なことだと思うので。例えば、どのようなことが発災時に起きてしまうのか？その後にはどのような事が起きてしまうのか。その後には、またさらにどういうことが起きてしまうのかという感じのことはたぶんこちら（東京防災）に書いたほうがよくて。そして、その時どのような行動をとるかという話。また、その延長として、今、家庭の身の回りにあるもので、例えば何ができるのか、身の回りからできる延長のことで何ができるのか、とか。そういうことはこちら（東京くらし防災）。例えば、こちら（東京防災）とかには、水道水の保存方法とか、水の運び方みたいなこと。「こういう体操をしたらいいよ」とか基本的に知っていたらいい知識というものがすごく載っているなと思うので、そういうことや、会社でできる話とか、あまり細かくは書けないかもしれないですけど、こちら（東京防災）に集約してしまうのかわかんないですけど。そういう知識の棲み分けをした方が良くのだろうな。それをまず軸で一つ決めてから考えた方が良くのだろうな。このまま、ここ（東京くらし防災）に新しいコンテンツを配慮者とかそういうもので入れていく、とかということではないのだろうなというのを思います。そのため、このタイトルは生かすかもしれないですけど、全面的にコンテンツなどの被っているものを整理して、というふうにしたほうが二

冊一緒に配るのだったらきっといいのだろうなあというふうに思います。

そして、やはり書き込み式みたいなものは、自分事にするというのはすごく有効だと思うのですが、複雑すぎると、今、話が出たように、やらないので、本当に簡単に書けるようにしておくとか、チェックシートにしておくとかにできるといいのかもしれない。あと、自分事化することはすごく難しいなといつも思うのですが、防災をコンテンツとして、取り上げるときに、必要な連絡先を紙で書いておくことはやはりすごく大事ではないでしょうか。(スマホの)電源が落ちてしまったとき、電話番号が一つも分からない、みたいな。私も自分の実家の電話番号しかもうわからなくなっているの、そういうものを紙で書いておく。これがもう自分の家の電話帳だよ、というのが、あるいはそういうものを家庭で一つ共有しているという。みんなでこれを共有しているみたいなものにしていくというのも意味があるのかな。それだとしたら、今の棲み分けみたいな部分を考えるといいのかなというふうに思いました。

一点、些末なことかもしれないですけど、コンテンツの中に「ミサイルが落ちたらどうしますか？」みたいな部分があるのですが、これどうにか対策できるものなのですかね。入れなければいけないのかもしれないですけど。

○中林委員長 要は、最近時々ある、Jアラートがなったらどうするのとか。

○中島委員 火山の噴火はまだ(わかる)。東京だと(火山の被害などは)どうなのですかね。

○中林委員長 東京だと、島は別ですけど、本島だと、富士山か浅間山が一番近いですよ。一番の風向きでいうと、富士山が噴火して降灰が落ち、それまで結構な時間タイムラグがあるのですけど。

○中島委員 建物入りましょう。とか？

○中林委員長 うん。そういうこともあるし、降灰情報がどんどん出てきて、それが続くとなると企業の中ではいろいろやらなければいけない。降灰で3cm、5cmと溜まって10cmになったら、もうほとんど車も動かなくなってしまうので。その前にいろいろ買い占めが始まるとか、いろいろなことが起こってくるので。

○中島委員 そうだとしたら、それこそ「東京くらし防災」に入れるのではなくて、知識編に入れるような内容かもしれないですね。個人単位でどうこうということではないのかなと。

○中林委員長 「東京くらし防災」は、地震と水害に偏ってしまってもいいのかもしれない。

○中島委員 それこそ「今ミサイルが落下したらどうしますか？」の部分、個人単位でできることあるのかな？みたいなのが、それこそ私には今わからない。

○鍵屋委員 安全度を高める方法はあります、必ず守れるというわけではないけれど、例えば地上にいるよりは、地下にいた方がいい。屋外よりは建物の中に入った方がいい。窓ガラスのそばに居るよりは離れたほうがいい。そういう安全度を高めるという考え方で、動きましようというのが、精一杯なのですよね。

○鈴木委員 あとは、(緊急一時避難施設を) 指定しているので、どこの駅だとか、どのビルが、とか、そこに逃げましょうという方法はあるので。そのような指定のところをしっかりと分かってもらうという点はあるのだけれども。それをおっしゃっているように、ここで書くべきかどうなのかというのがあります。

○中島委員 結構それぞれ第一歩ということを考えるとしたら、そこまで網羅しようとする紙幅が足りないみたいな気もするので、こちら(東京防災)に入れてしまうような内容なのかなと思ったりします。

○中林委員長 インデックス的に、見落とさないように、項目があつて。それでそこに○をつけて、必要だなと思った時に、この本(東京くらし防災)ではなくてこちら(東京防災)へ誘導されればそれでいい。そのように考えると、やはり今チェックしてほしいことというのは、説明はなくても一応項目としてはあつて。という形で考えられればいいのではないかな。

○鍵屋委員 もしかしたらA3一枚くらいの、それを書くためにこれ(本)を見てみましょう、みたいな。そして、これにはもうデフォルトがあるから、とりあえずこれを備えているかどうか、最後に○×をつけてみましょう、みたいな感じで。×はまずいね、あるいは足りないね。それで次のあなたのアクションを書いて、これBCM(ビジネスコンテニューマネジメント)なのですが、課題を特定して、その課題をどのように解決するという解決策を書いて、そして担当者と完了予定日を書くのですよ。そうすると、ある程度のものができます。だから、朝起きてトイレの水が出ない、つまりトイレができなくなります、と。地震が起きて、そのために必要な物は簡易トイレ、と。そして、現状は、簡易トイレは必要?そのような形のものを書くために、細かく見てみようかという時にこれ(東京防災)が。なんとなく最終的にはA3、A4一枚で、だいたい家族の防災対策はできると思うのですよ。知ることがいっぱい知識があってもいいのですけれど。

○中林委員長 そこへたどり着くまでのゲートがかなり高いの。

○富川委員 電話番号が全世帯一番ギョッとするとします。今、電話番号を空読みできる人は、ほとんどいないと思うので、

○鍵屋委員 (ほかの人の電話番号、空読みしようとしても) まったくわからないね。

○富川委員 「電話番号を書いておいて」というだけで少しギョッとするかなと思います。子供も言えないし、大人も言えないという。

○中林委員長 やはり本の目次なのですよ。何があるか、ということが順番に分かるような目次になっているのだけれど、これがもう少し項目ごとに、深さではなくて、間口としての項目を書いて、「私、これと、これと、これを見たいわ」と、○をつけていけると。下にもしっかりページがあつて、それでそこを見ると、これはこういうことで、詳しくはこちらへ、と誘導されるような。そのような目次イコール実は私が読みたい部分、というチェックができるようにして。そして、ここを読んだけど、今度はこれを読もう、みたいにして、次もまた増えていくかもしれない。そして全部○がついたら、あなたはよく勉強しましたね、とい

う話のような。そのような目次イコールチェックリストです、というような形で開いていた
だけると、さて、最初どれかな、となる。トイレの中で座りながらやる、うちの娘とか奥さん
もそうなのだけど、結構トイレが長いよね。「何をしていたの?」と聞くと、「本を読ん
でいた」と言うの。そのような時にきちんと見て、というのをね。

○鍵屋委員 トイレで書いてもらうというね。

○中林委員長 そうそう、そうそう。

○富川委員 もし、私が表紙を担当するとなったら、たぶん最初に名前を書かせると思いま
す、教科書みたいに。名前と電話番号を書くだけで手に取るので。

○鍵屋委員 すごい!

○富川委員 教科書って、自分が名前を書かないといけない、新学期この前全部書いたの
で。名前を書くことで、ものが自分のものになるのだなとすごく思っ

○中林委員長 では、裏表紙には大事な人、三人の電話番号?

○富川委員 冊子である必要性というのが、やはりそういうところで。「これはうちのもの」
というのがわかるような内容にしていけるわけで。

○鈴木委員 母子手帳とかお薬手帳みたいなイメージですね。

○富川委員 そういう自分のもの、という感覚がいいかなと思います。電話番号とかもここ
に書いてしまえばすごく簡単じゃないですか、マジックペンさえあれば。

○鍵屋委員 母子手帳を捨てる人はいないですもんね!

○富川委員 確かに、そうですね。個人情報が入っているわけではないけど。イメージで、
教科書が届いたとき、教科書も薄いと読むじゃないですか。たぶん皆さんも、学生の時に配
られた教科書で最初、音楽の教科書とか体育の教科書とか、簡単なものから読まれたと思
うのですけど。そういうイメージがこちら(東京くらし防災)にはあって、でも読んでみたら
すごく具体的にタメになったというのが、「東京くらし防災」に関してはすごく必要な

○中林委員長 やはり(最初は)こちら(東京くらし防災)を見るね。

○富川委員 最初たぶんそうだと思う。そして、「東京くらし防災」だけでは、絶対物足り
ない人もいると思うのですよ。それだけ今はすごく防災意識も上がっているの。そこでの
フラストレーションも、ここ(東京防災)でいかようにも解決できるよ、というような流れ
が一番現実的に見てくれるかなと。

○中林委員長 だから、それでいくとね、この「東京くらし防災」9ページにこの本のキャ
ラクター紹介の部分。今回も家族紹介で、どういう人のお話か、というものがあったりして
もいいかもね。

○鈴木委員 東京都の今の統計で単身世帯はどれぐらいでしたっけ?全部配るとすると、
家族をターゲットにした時に、家族の方が少なかったら、関係ないよねという話になってく
るので。その率とかも考えて。

○鍵屋委員 例えば最後には、こういうのが必要ですよ、と。そして、まずは、最初に0
➡1とか2とか、それぐらいの一枚の書けるシートがあればいいと思うのですよね。そして、

こちら（東京くらし防災）の方が例えば、お年寄りとか高齢者の方が入っていればいいと思うのですよね。やはり私は入れた方がいいと思う、そういうのが入っていれば、「例えば、障害のある子がいるから、ここ見よう」となる。そして、そこの特記事項のところを増やしていく。

○中林委員長 基本はファミリーなのだけど、家族同然の大事な人がいるでしょ。今の原稿案でペットの記載がないけど。同居していないけど大事な人もいる。これ（東京くらし防災）を女性向けと言え言えほど男性が見なくなるのだよ。

○鈴木委員 インデックスとしては、やはりもう全部を載せておくというか。さっき中林先生がおっしゃったように、ペットのことは私も思っていた。ある程度の目次だけなのかもしれないけど、「でもその場合も配慮しなきゃいけないよね」ということが、読んだ人、学校の先生、保育者とかにも（伝わるように）。そこを考えなければいけないのだということになると、たぶん家庭に配るのだけど、家庭の保護者だけが読むわけではないから、そこを取り巻く人たちにも読んでほしい、みたいな視点を持ってほしい。

項目は多様に載せておく必要があるかなと思います。富川さんがおっしゃったように、やはり僕もシートは大事だな、と。僕も書くかという、なかなか面倒くさいなという。だから、それがいけないのだという話もあるけれど、さっきの3分で、とおっしゃったのはすごく刺さる。というか、最近学生といろいろ話をしていくと、やはりもう（所要時間が）長いのは遠慮するので、そしたらもうこれは最初の3分で読める、ではないですけど、3分で全部必要な知識がそろそろよ、というものがファーストステップとして必要だと思う。それで、シートだから最初なのか最後なのかという問題もあるのかな。

○中林委員長 シートは別がいい。「3分で書ける我が家の防災シート」と謳って、そこに家族の人数とかを入れればもうできてしまうような、そんなものがあると、みんなも安心するんじゃないですか。そして、それを埋めてみよう。でもうちにはお年寄りもいるからな、子供がいるからな、といったときは、このページにジャンプ、このページにジャンプなどと言えいい。それをトイレの壁みたいに、目につくところに貼っておいてください、と。なんとなく自分のそれに固執するのですね。やはり、一枚、紙なのですよ。

○鍵屋委員 それをコピーして家に貼っておくだけでいい、最低限それだけ。使わなければ使わなければと言っているうちに忘れてしまう。そうすると誰かが思い出す必要がありますね。そして、これを書く担当者などを決めておけばよい。担当者はお父さんとか。決まればもういい。

○中林委員長 委託先はもう決まっているの？

○事務局 これから。

○中林委員長 委託が延びているというのは、私にとっては、勿怪の幸い。今のうちにいろいろ言っといたほうが、よりいいものが短期間にできるのだろう。そういう意味で、このエクセルシートは、都の方で整理したものということですね。これは、今のような形で、目指す役割分担を明確にすることと、まず、大きい項目としては基本的には同じ項目で、0 ➡ 1

とか、こちら（東京くらし防災）は本当に必要なことだけ書いてあって、もう少し詳しく「できれば」というのは、こちら（東京防災）にしっかり書き込んで、「さらに」というのは、QRコードで飛んでいく形の構成で、フォローアップしていくということ。それと、こちら（東京くらし防災）は少なくともマイブックにしてもらいたいので、そういう構成など。白紙でどんどん書き込むというのは、最後なのよね。○をつけることや、電話番号とか名前とか、そのような機微に触れるようなところをまず書き混んでもらって、そこからどんどん深みにはまって「東京防災」に持っていけるような。そういう役割が、こちらの「東京くらし防災」にはあるのです。そのコンセプトはしっかりと受け止めて、事業者さんが考えた原案をなるべく早くたたき台を出していただいて。中島さんもいるこの場で叩くというのが次（第三回委員会）かなと思うのですが。そうすると、あとはもう書いていくという話になってしまうので。一番大事なのは、役割と、その役割に合わせた編集と、どこをどの程度二冊で書き分けるかという内容になると思うのです。

○鈴木委員 問題提起というか、すごい問題意識として感じていることがあります。僕もこれ（東京防災）とこれ（東京くらし防災）を、いろいろなところで使っています。実際、いろいろな研修や大学の授業で使ってみるとか。同じように、教員が学校で、防災宿泊とかやっているのですが、結構愕然とするのですよね。なぜかという、泊まるだけでおしまいとか。さらに私語厳禁とか、訳が分からない。何のために泊まるのかが分からない。そしてその時間だけ体育館で寝てみよう、みたいなのがずっと続いていて。今自分の娘も行っているのですが、実際そうなのですよ。そうではなくて本当だったらこれ（東京防災）とこれ（東京くらし防災）とかも使って、夜宿泊した時に、自分たちで生き延びてみようではないけど、私語厳禁な話しなわけがない。周りが校庭なら、校庭だけでもいいのですが、その（体験の）範囲でどのようにできるか。泊まって何が起きるのか、自分たちで考えてみよう、話してみようというのを夜まで、とかいうなら分かるのですが。こういうものを配られても、学校現場は全然何も変わってないというのはもったいない。せつかく作るので、今後の話かもしれないのですが、作ったものを「学校の先生」とか「保育園の先生」とか、自分たちが何をしたいかよくわからないという方のテキストにもなると思っていて。だから、これが家庭では保護者が読んでください、でいいのですが、僕としてはこれ（東京くらし防災）とこれ（東京防災）の間かなにかで子供に関わる人とかも、これを読んで、しっかり知識を得てね、とか。例えば、LGBTQの子たちもいるのだとか、女性が避難所とかだったら、性被害に遭うのだ、とかいうようなことも含めて、学校の方で教える。知識としてもってもらおうと、災害の時に関連死とかも含めていろいろ救えると思うのです。それはこちら（東京くらし防災）なのか、やはりこちら（東京防災）なのかで、こちら（東京防災）にも僕は、さっき言ったように、当事者へのメッセージで、あなたたちは見捨てないですよ。貴方達の命を救う本ですよ。ということに加えて、そこに関わる人間で、介助をしている人たちだとか、子供に関わる教員だとか。しっかりとこれを読んでね、と、それぐらいの知識は得てね、というところのメッセージで言うと、保護者だけではない、一歩で、誰もが読むところに、

そのところを一枚か二枚でも入れてほしいなという気持ち。今の本は施設にも配っていたと思うのですよね。これも、学校の先生とかにもきちんと配って、教育現場とかにも送り届けてほしいなというか。大川小学校の事案とかも自分がやってきたりしているので、学校の先生の防災知識（や意識）について、「僕らは教科を教えるけど、命を守るのではない」というので。それは悪い意味ではなくて、実際、そのような教育もなされてないし、わからない、という人たちに、具体で、各家庭にはこういうものも配っていますよね。これぐらいの知識は家庭でも必要だし、「教員」とか「保育者」とか、施設の間人もやはりこれぐらいは知っていますよ、という共通のテキストみたいな形の位置付けがなにかできないかな。これを使って生き延びてみましょう、研修にも使ってくださいね。ということとか、場合によっては専門家もみんないるので、派遣しますよ、ではないですけど、都の職員なりなんなりで、これを作ったら送っておしまいではなくて、必要だったらこれをテキストとしても、宿泊防災の時でも活きますよ、と。本当は都ではなくて区なのかもしれないのですけど。こういうことができるとうごく活きるかな。自助を助ける共助公助というか、そういう人たちの所ですごく意義があるものになるのではないのかな。すみません。広げすぎてしまいました。

○中林委員長 それはすごく大事なことで、さっき、私がどういう単位で防災を考えるというので、健全な家族というのが前提で、健全者がいる家族もあるが、家族が要支援者ですという老々家族もたくさん増えてきているのですが、その人が自分で読んでできることはほとんどないかもしれない。そういう人を含めて、ここで多様な視点での記載というのが今、お話しがあったように、要するに支援する人が、「こういうことなのね、それなら、こういう支援をしてあげればいいのか」というのが読み取れるようなことをしっかりと書くことが大事で。本人が読んで、こういうことしてくれる人がいたらいいね、と思わせるけど、自分ではできない。そこが大事なのだということなので、多様な視点で記載するところこそ、本人だけに読んでもらうわけではない。このようなことをしっかりと打ち出しておかないといけないなと改めて今のお話を聞いて思ったのですけど。そうすると、例えば、子供の防災で、家庭にいるときは親ですが、学校に行ったら学校の先生が親になるので、そういう場合にはどうするの、というのも読んでいただく。それから高齢者、これも支援が必要な高齢者から障害者もちろん、そういう方たちは日常支援をしている方もいるけど、最大的に支援するには、どうしたらいいのだということが課題。そのような視点で記載するという多様な視点での記載にどういう支援が必要なのかという視点で記載をして、隣の人でもできる。その知識を少し持っているだけで。そういう方が気づいていけるような考え方でいいか？ 確かにおっしゃるように障害者の方に対して、障害を持っている方は、どうすると、書くだけでは、本が人読んでいて、それ以上でどうなるのという話で終わってしまうのでおっしゃる通りです。ではどうするのと、例えば、よく障害者とか高齢者で玄関まではあなた自分で出てこられるようにしてね、玄関まで出てきてドア開けてくれたら、通りがかりの人が助けるかもしれない。助けに行った人もすぐ助けられる。そういう支援する人と支援が必要な人は、ペアで初めて生き残るのですという視点をしっかりと打ち出していかないと。

○富川委員 「東京くらし防災」を作ったときに、私が個人的にすごく足りなかったなと思うのが、具体的な事例です。さっき池上先生もおっしゃったように。イメージなどが特に、災害時のことにおいては、ネガティブなことですし、そのイメージをしたくないという気持ちもあるので、イメージというのが、そもそもライフラインが止まったらどうなるかというのを言われても、たぶんそのイメージはとてもわかり難いので、鍵屋先生がおっしゃったみたいに、朝起きて夜寝るまでの間のアクションを一個一個出すとか、そこまでやはり具体的に落として行かないと人はなかなかイメージしてくれないなというのがあって。やはり当事者の方たちがどういう立場で、どういうことを実際に体験したのか、という当事者の声で、すごく大事だと思う。なかなかそれが入っていなかったなと思うので。間口をたくさん広げるといふ時に、本当に一言でもこういう方には性自認が、こういう方には、実際こういうことが実際にあったのだ、というもの。もしかしたらわざわざすることかもしれないけれど、そういうことを当事者でない人に興味を持たせるという意味では、いろいろツラツラ書くよりも一言、実際、こういうことがあったという、その方たちが言っている声というのが一番響くかなと思います。そこでやっとなら具体的なになるというか、言えないことももちろんあるかもしれないのですが、ギリギリの線は、やはりギョッとさせるではないけど、怖がらせるわけじゃなくて、例えば子供でも発達障害の子はやはりすごく困ったことがたくさんあるわけじゃないですか。お子さんなんて、言うことも聞かないことも多いわけで。一番ギョッとすることがあったら、自分にも絶対当てはまるはずなのですね。なので、本当にリアルな声みたいなのは、入れていけたらどうなのかな、というのはすごく思います。

○鍵屋委員 構成案の話だと遠慮していたのですが、やはり活用案というのもすごく大事で、全世帯に配布されるメリットというのは、そのメリット活かして鈴木先生がおっしゃるように、取り組んでいこうという学校の先生も、みんなが一応家にあるのだよ。だから、これを使って勉強しようというのは、すごくいいと思います。自分だけで書けない人もいると言うのだとすれば、例えば、普段の支援者である福祉の事業者さんが、あるいは自治会とか、防災施設とか、そういう支援者の方々が一緒に書いてあげられるということによって、発災時に、とにかく苦しさがだいぶ少なくなるということは可能なので。そういった支援者向けに書いて、そして、できれば身近の書けない、書けそうにないような人で、普段から付き合いのある人を助けましょう、と福祉事業者に。地域はかなり積極的に書いてあります。それは個別避難計画というのにも繋がって、避難までのことを書くと個別避難計画になるので。区市町村もその話は乗りやすいかなというふうに思います。そういうところが出るA4シートとかA3シートというふうに考えると、たぶんお手伝いに行く方も、これに、(関係が)ある、ない、と埋めていけばできるくらいのレベルでもいいのかなと思いますけどね。

○中林委員長 それはそういうシチュエーションができた時の話で、最初はまず家庭に配られる。その人が、これをやってみなければいけないねと初めに思って。でも私、一人ではやってできないわという時にいつも通う施設に持って行って、実はこんな本が来たのだけでも、この辺のことというのは誰がしてくれるのですかねとか、そういうようなところから

広がっていくようなことに繋げて、さあシートを作りましょう、と。まさにサンプルシートを作るというのは、もうインクルーシブ防災そのものなのですよ。

○鍵屋委員 サンプルシート、いいですね。

○中林委員長 誰が助けてくれるのだという人の名前、電話番号ぐらいで、さあ書いといてみたいな話です。そういうことですよ。最初の一步はこれですが、そこから先はそのシートをダウンロードで落としていただければ、A3とかカラーとかは、プリンターによって決まってしまうのだよね。ここにどこまで詰めこめられるかというとは実は、こういうことが起きたのです。事例集を書いていくと、もう膨大になってしまいますよ。だから、事例はひょっとしたら、QRコードで。そして、この音声コードで聞いてもらえる、等の形で、いろいろな実話を準備して、項目のところで、それでは、実際の災害ではどうだったのというのを、これを使って、音で聞いてもらうような具体的な形を取るのが一番いいのです。ドキッとさせるというのが今時で言うと、やはりアニメーション、あるいは漫画。だからこの黄色についているこのマンガは、都心のオフィスが中心の話なんですけど、これのマンション版とか、いろいろなシチュエーションをむしろ最初のところにあつた方がいいかもしれない。まず、最初パッと見て漫画があると絶対見ると思うのだ。特に若い世代の人。そういうことで漫画のこれをそのまま転用できるのか、あるいは書き下ろしが必要になるのか？確かに文字だけでなく、アニメーションなども。実際地震が本当来たらどんなことになってしまうのという最初のイントロの画面で、絵が文字よりも語ってくれるような気がします。

○富川委員 マガジンハウスさんの防災ブック、本当に読みやすいんですけど、何がそうさせるかと言うと、結構対談方式というか、誰かが語っているのを、私たちが読んでいたんですけど、誰かが語っているのを聞いているような構成をされて。私がいうのもなんですけど。自分で読むと言うよりは、軽く聞けるみたいな構成にされているのが、すごくいつも感動するんですけど、そういうやり取りとかは、この人はこうかもしれないけど。例えば防災リュックに関して、編集部の何々さんはこういう立場でこういうものを持っています、逆にこういう人はこういうものを持っていますみたいなのを写真で開示されていて。それに対してコメンテーターがコメントしていくみたいな時に、そういうふうに具体的なものを出されると、私だったらこうだなみたいなのがすごくイメージしやすいと思うのですよね。なので、自分で何か情報をつがつ取りに行くというよりは、どんどん改善していくというか、こういう時にはこうだけど、あなたはどうか？みたいな問いかけがうまく出来ていくと、いいのかなと思うので、本当にその一言。例えばイラストでこういうことが起きたよ、ということが一つ書いてあるだけでも、その人の具体的なものであれば、自分にも具体的になると思うので、その辺は割と「東京くらし防災」に書いてあると、読者の頭の中に入ってきやすいのかなとすごく思うので。こういう時にはこういうことが起きます、あなたはどうしますか？と書いてあるよりは、実際にこういうことがこの人に起きたのだから。みたいな方がすんなり入るのかなということを思っていました。構成が変わってくるお話かもしれないですけど。

○中島委員 ありがとうございます。わたしもこの「東京くらし防災」に関わらせていただいたのですが、その時に体験ボイスみたいなものが最後に入ることになったのですが、やはりこういう事があると自分事として考えやすいというか。ある意味のケーススタディだと思うのですが、こういうことに困ってしまうのか、ということがわかると（簡単に頭に）入ってくるというか、それならこうするのか？みたいなことが、理屈ではなくわかりやすいというか、結構そういうわけだったのですよね。

○富川委員 最初、体験ボイスが入る構成だったのは、ほんのわずかだったのですよね。

○中島委員 ページページに体験ボイスみたいなのが、ちょこちょこ入っているぞという感じだったのです。後からこういうことした方がいいのではないかと、という話が出たので、無理やり入れてくださったのですよ。そういう経緯でこうなったのですが、今皆さん、言ってくくださったように、その準備のものとか、私の家はこうしますとか、単身の私は、一人暮らしですごく狭い部屋住んでいて、正直水何リットルなんて置けないよ、その代わりにこういう工夫していますとか、あと結局玄関先広くしておこうね、と言われても玄関先に靴箱おかないと何ともならないのだよ、というおうちとかもたぶん東京にはたくさんあって。その時に私も、自分で本を作るときにはそうしているのですが、それでは、どういう風にしていくと、より良いのか、とかということを具体的にアドバイスいただくとか、そういう事例を入れると、とても頭がクリアになるというか、では、自分ならこうしたらいいのかな？みたいなのは分かりやすい。理論だけ伝えるよりもかなりわかりやすいと思います、なので、こちら（東京くらし防災）の方はそういうことはやはり入れるのだったら、すごく役に立つ実践編みたいな感じの位置づけもすごくいいのかもしれないなと思います。

核といったらあれですけど、実際ではなくても、モデルケースみたいな作るのもいいと思うのですよねとか、あとやはり読者の人の話とかを聞いていると、本当に水が出なくなってしまうのだよとか、電気使えなくなってそうか、テレビつけられないのかとか、そういうことも全く想像つかないというか、本当にそのレベルからのスタートだと思うのです。結構しっかり防災対策をしているという友人とかもキックボードで逃げようと思うみたいな感じで、「いやちょっと・・・」、「あれがいいと思うのだよね！」みたいな話とかする、そういう程度なのだなと思います。そうなので、やはり実際にどんな事が起きたのかということ具体的に言うとか、こういうことを用意したほうがいいよという議論があって、具体的にケースを示すとかというのは、どうやったら分かりやすく伝わるのかという意味では、すごく気をつけること。表現の仕方として。なので、少し知識のページを削れたとしても、そういうことをすると繰り返し読んでくれるようになるのではないかと思います。逆にこちら（東京防災）は、もはやそういうのは要らないのだと思うのですよね。東京くらし防災を、もう本当にさかまたできるということにして、個人個人や家庭単位でできるもの、今すぐできること、ということにするのだったら実例を入れるとすごくいいかなというふうに思います。

○池上副委員長 それに関して、やはり災害を体験してみないと、なかなか想像できない。

そのためにこの体験ボイスというのが非常に大切。たとえば、角田さんという、元NHKの職員の方で、今一緒に仕事しているのですけれど、その方が、震災後、自分が道路に出てタクシーが来ないのにタクシーを待っていて、これからタバコを買いに行こうという自分がいてびっくりしたという。それぐらい渦中にいてどうなったのか、気がつくまでに相当時間がかかるということの1つの例なのですけれど、そのように体験したことのない人は本当に分からないのですよ。停電になったらどうするの？と。そんな真っ暗になってしまうということもね。真っ暗闇を経験していないのですから、どういう状態になるかは、なかなか分からない。震災後に1995年の阪神淡路大震災の後に私たちがある小学校に行って、学校防災教育の中で、夜、体育館で暗闇を体験しようということで、真っ暗にして、話し手の私は檀上で動いてくださいと言うのです。びっくりしましたが、暗闇の中で生活するという事はすごいことなのだ、こういうふうに電気がないことなのです。市民防災研究団の明かりもサラダオイルで明かりを作って、私が持って行ったの。本当にそれを置いて、本当に暗がりの中で、子供達を先生方と一緒に、実際に阪神ではこういうことがあったのだという暗闇を体験しました。そういう風に想像できないのですよね。だから、先ほど鈴木先生が学校教育とか先生方がよくわかっていらっしゃらないと言いましたが、本当にそうなのです。小学校にも消防署や消防団、消防署の人がいて、お話をしたり、我々や市民防災研究所の職員と一緒にいたり、逆に子供からものすごく鋭い質問が出て答えられない先生もたくさんおられるのですよ。例えば「僕がずっと通っている道は、高い塀で囲まれているところだけど、地震の時には塀から離れろと言うけど、両側に塀がある時には僕はどこに隠れたらいいのですか？」と、4年生の子から。返事に困りましてね。その時、ベテランの消防署の方が、「今気がついてよかったね。それなら遠回りしてでも塀のないところ、通学路にして歩こう」と言ったのですよ。若い方だったのね。それこそ一緒にマップ作ろうではないですけど、そういう身近なところから入って行くと、子供たちもずっと、こういうことが大事なのだ、マップを作ろう、そして実際、自分の通学路を歩いてみて、そこにどんな危険があるのか考えてみよう。そういうあたりからやると割と自分事として考えやすい。そんなことがありましたね。

○中林委員長 なんでも使うというのと、こういう体験談を聞くことで、やはり私は、こういうことになると思って学ぶとか。たしかにそういうことは最初の入り口を開かせるために大事なのでしょうね。この体験ボイスというのは、実際に何かテキストがあつて、そこから使うような、いろいろな話を聞くのかな、これの原点はあるのですか？

○中島委員 制作会社の方が実際に取材された、とおっしゃっていました。被災された方に取材をされて、そこからピックアップされているというふうに私たちは聞きました。なので、原点があるのだと思う。

○中林委員長 少なくとも切り分けているから、50代熊本の方は、同じ人が言っているのかな。

○中島委員 あると思います。ひとりの方から1ボイスではないのかもしれないですね。

あと、自分が前作った時は自分事化として、有効かなと思ったのが、やはり自分で一回やってみようみたいな。これをまず家庭でやってみるといいよ、みたいなことを書いたときに、結構反響があったのですよね。それいいかなと思ったのですが、例えば全部の電気を抜いてみる、みたいな。ブレーカーを全部落としてみて、一晩過ごして見ましょう。みたいなこととか。そうすると、トイレが流れないわ、水も出ないのか、みたいなことがわかるので、それなら、カセットコンロを使って一晩ランタンで暮らしてみよう、みたいな話になるとか、あとは非常食を食べてみようとか、そういうのも私たちが考えつくことなのですけど、やはりやったことない人というのもたくさんいらっしゃると思うのですよね。なので、そういう具体的にできる提案。普段の生活でできる提案みたいなことをこちら（東京くらし防災）の本には入れて行く。その具体的な事例と一緒にに行ったりすると、役に立つかなというのは思いました。

○中林委員長 やってみようというか、体験してみようとか。

○中島委員 そうです。エマージェンシーシートを、持ち歩こうとよく言っているけど、どのくらい暖かいのかがさっぱりわからない、みたいな。そういうものがあると思います。

○鈴木委員 確かに。持っているけど。

○中島委員 本当に冬の2月大丈夫？みたいなこととか。理論では知っているのだけれども、経験してみると全然違うと思うのですよね。あとソーラーランタンとかは本当に携帯充電できるの？何時間持つの？どのくらい明るいのか、そういうのはやはり体験してみないと分からないのかなと思って。大事なことは、体験することのような気がするのです。こちら（東京くらし防災）の方に疑似ですけど、そういうことを促せると、より自分のことができるようになるのではないかなと思います。

取材でお聞きして、なるほどと思ったのが携帯電話の番号もそうですけど、今、空でgoogle マップを見ないで行ける友達の家は何件ありますか？と言われたのですが、私はいけないな、と思ったのです。でも、歩ける範囲で、住所を知らなくてもお互いに行けるといいう道を作っておく、みたいなことがすごく大事なことでもあって。そういう自分の見直しではないですけど、そのようなコーナーを作ってみるといいうのもわかりやすいかなとか。

あと簡単に防災Q&Aみたいな、二択クイズみたいなことをするとすごく反応良かったりします。単純ですけど、そういうゲーム性とか、そういうことがあると新しい発見もしやすいかなと思います。

○中林委員長 東京都防災検定を作りますよね。なので、そういうのも連動したら、面白い。

○鍵屋委員 私は、さっき何度もシートのお話をしましたが、いろいろやった時にNECの一番悩みは、「社員がなかなか備えない」ということ。会社はすごく頑張るのですよ。でも、社員が備えてくれない、と困った時にこれが、一番反響あったのですよ。朝何時に起きてなにをやるというのが、圧倒的に多くの反響があって。これはよかったですよ、というお話をいただいたので。例えば企業さんが社員に、これを作りなさい、と。かなりのお話にもなるので配り先として、本人はもちろん、企業さんとかがダウンロードできるようなシートをつ

けてあげるとダウンロードも簡単にできるようなる。それで、企業にそのメッセージをしっかりと伝えて、社員の自助こそが企業のBCPの基本ですよ、というのをやっていくのがいいかなと。体験してみよう、いいですね。やっていないな。

○富川委員 実際、ビニールシートとか、そうでもないですもんね。

○中島委員 そういうのもね。やはり知っておくと全然違うと思うのですよね。

○中林委員長 消火器を持っている人も、だいたいが扱ったことないのだよ。

○鍵屋委員 使い方がわからないから、消火器ごと火の中に投げってしまうのだよ。

○中林委員長 携帯トイレも使ってみるといふ。

○中島委員 携帯トイレもいろいろあるので、使ってみると自分に合うものとか、家庭にいいものとかがきつとあるはずなのですよね。そういうことをするといいのですよ、みたいなレベルの話をごちら（東京くらし防災）の話にしていく。こういう「実際にやってもらう」ということが大事かなと思っていて。

○中林委員長 経験してみようリストがあつて、一つチェックして、とか。そういうコーナーがあつて。それが分かりやすくできるようになっているとかいうのはすごくいいような気がします。あと、先ほど多様な視点で、というところで、特に要配慮者に対する防災の支援について、支援者側に読んでもらう。それは支援者に読んでもらうけれども、こういう支援が必要なのですよ、という簡単なノウハウ・技術を含むもの。これは、しっかりと分かっている方にチェックをしてもらって原稿をしっかりと作らないと。なまじ変なものを作ってしまうと、かえってエラーが発生してしまうので。その辺は体制を考えてやる必要がある、これは委託の中身に入ることかもしれませんが、そういう方にしっかりと原稿も修正してもらった形でやる。例えば、視覚障害者は、災害のあとで歩けない、家の中も歩けない。つまり、家具が動く、様子が変わる、といったことだけで足がすくんでしまって出られない。家の外に出ても、液状化やその他で路面がいつもと違うから、白杖があつても歩けない。大丈夫ですか？と言って支援してもらう時に、よくわからない人に手首を持って引っ張られることも怖いと。肘を持ってくれないと、（肩から手首まで）クッションが二つあるので、いろいろな動きになってしまう。肘を持ってもらうと、一つしか動きが出ない。手首だと、よくわからない、と。そういうようなことも含めて。障害によって、かなり支援の仕方が違うから、介護が出来る方にしっかりと見てもらって、最低限こういうことを知って支援してあげてください、ということ、しっかりとやらないといけないなと思った。それは、委託業務も含めて。あまり時間ない中でも、ここはしっかりとっておかないといけない。

○鈴木委員 その構成案の書き方で、障害者とか高齢者（程度のくくり）となってしまうのだけど、そのくくられ方自体に、問題がある。中林先生がおっしゃったように、その中でさらに項目として少し分けられてきているので、一歩前進、という言い方は変なのですが、さらに見てもらつところで、都の中に担当の部署がそもそもあるので、そこに今まで上がってきている声とかを出してもらえれば。選挙の事務の時にどのように対応するかとかも、マニュアルとかも参考にできると思うので。そういうのも参考に、と入れ込んでい

くことが大事かなと、僕も思います。

○中林委員長 障害者の方も、やはり交通状況がいつもと違ってしまうと、道を歩いていて、音がいつもと違うことがすごく怖いらしいですね。交差点は、ピコピコと、信号があれば音がするし、車がどう動いている交差点、とにかく車の動いている方向には道路がある、というイメージがあり、車道へ出ないように歩けばいいということなのだけど、あまり慣れてない道路だと、脇から車が来た時はかなり怖い。そのような中、いろいろな特性があるから。この支援をして、一緒にみんなが助かるために、ということで最低限、健常者にこういうことだけを知っておいて頂けると、いきなり（障害者に）出くわしたときにでも支援ができますよ。そういうことが学べるようなスタイルにしてくれるといいですよ。そういう目線で見ると、今までのものだと、やや虻蜂取らずみたいな部分があったのかもしれないですね。本人にとってはもう慣れている話で、初めて見る人たちはそうなのだ、と思うのだけど、いざ出くわしたら、何をやったらいいのかわからない、ということになりかねないので。そこは、慎重に。これから高齢社会によって、特に共助というのが非常に大事になります。共助の技を知ってもらう、という多様な視点で記載というのは、実は支援する側も多様な支援ができるし、簡単なのですということを知ってもらう。

○池上副委員長 障害者のお話があったので。東京消防庁で災害時支援ボランティアという団体のお話になりますが、私も関係している江東区聴覚障害グループがありまして、その中に、「耳が聞こえない、というだけで、弱者という枠組みの中に入れられてしまう。でも、僕たちはすごく体は元気で、知識さえもらえれば支援ができる」とおっしゃった方がいます。東京消防庁からは「前例がないから」という理由で二、三回断られたのですが、たまたま私がそれに関係しているものですから、「諦めずに挑戦して欲しい」と言ったら、手話通訳者と一緒に、見事全部の講習を受け終えて、登録しているのです。そして、その時におっしゃったことが、「私たちは助けられる側、というふうに、いつもは入れられているけど、私たちも助ける側にまわりたい」と。これがすごく印象的でね。障害者で一括りにするわけではなくて、その実例もあるので、支援に回れる人もいるよ、ということもとてもいい話なので、（本の）どこかで、ご紹介できたらいいかなと思いました。

○富川委員 それは、小さいお子さんをお持ちのお母さんとかも同じだと思います。お子さんは要配慮者かもしれないですけど、やはり（お母さん本人は）成人女性なので、動けるところがどんどん動いてもらわないと、というところもある。その聴覚障害者の方たちと違うところは「子連れ様」みたいな意識もあって生活している方も多いので、支援側に参加してこない。（「東京くらし防災」の時もお伝えしたのですが、）参加しなくても良いと思っている人たちもいるので、そうではないというような啓発というか、そういうメッセージもすごく伝えたいというのはありますよね。障害をお持ちのその方もそうだし、自分たちで動ける人も実際にいるのだ、というようなメッセージは、本人たちにも伝えたいところでもありますね。

○鍵屋委員 それに被せて言うと、74歳以下だと高齢者の自立している人は95%以上いて、

75 歳以上でも七割は自立して暮らしているのですね。そういう人達はむしろ、経験値もあるので、うまく動けるし、支援側に回れる。年寄りだから守ってもらわなければ、ではなくて、元気に動ける人はぜひ支援する。その経験を活かしてください、と。

○中林委員長 でも、その最たるは避難所ですよ。避難所、と言い過ぎるせいなのだろうけど、「私たちは避難してきたのだ」とか「サービスしてもらおうのが当然だ」と元気な人が思っているわけです。そして、「あれもこれも持ってこい」という話しになってしまう。そうではないのです、ということもしっかりと。これからはそんなこと言っても持っていける人が減っているのだよ。

もう一つ、これで言うと、外国人もほとんどは実は聴覚障害者と一緒かもしれない。つまり、日本語がわからない、聞こえているけど理解できない。だけど体力抜群、視力もいい。そういう方たちにもいか動いてもらうということを考える。これはやはり弱者の視点でしか書いてない。共生する防災です、外国の方とも一緒に防災をやってもらって、あるいは外国の方が誘導して、そのようなことも含めて何ができて何ができないのか、この部分を誰が捉えるのかという。そういう点で、多様な視点というふうに構成できると、いいのかなと。自助と共助が渾然一体なのです。自助で足りないところを助けるということ、それぞれの役割分担として意識すれば、結構ボランティアが来る前にいろいろなことができてしまいそうですね。

○鈴木委員 メッセージの出し方が難しいですね。行政がそのところを、ずっと今までやってきている状態で。目が行き届かなくて、自閉症の方とか、僕らいろいろなものを見てきているのですが、逆に声が出せなくて助けられなかったという例もいっぱいあるので。高齢者で元気な人はやってもらいましょう、障害者で元気な人はやってもらう。それは当たり前前の話なのだけど、そのメッセージをあえて出すのか。この本での出し方はすごく難しいかなというふうには思いますね。フィフティフィフティでないのは確かだと思います。でも、どこかに書くのは僕も賛成というのがあるので、どこかにある程度なのかな、という。子供も被災されて、被災の時に中学校とかの状況がニュースとかもたくさん取り上げられるのですが、そうでない（共助に回れない）子供たちもいっぱい居るので。それを学校の先生とかがメッセージを見てしまうと逆の方向に使うパターンというのもいっぱいあるので、難しいなと思いつつ今話を聞いています。

○富川委員 サポートを受けたい人も積極的に、受援力というか、自分で手を挙げる環境も必要だし、サポートしてあげる姿勢もやはりすごく大事。そこはある程度ボーダーレスである視点もすごく大事だと思うので。

○鈴木委員 受援力と言うのですが、受援できない人たちを僕はずっと見ているのですよ。だから、受援を強調するのはどうなのかな。これが全戸配布した場合に、受援しましょうね、と。いや、僕ら受援してもらえてないし、声も拾ってもらえてないし。自分で言える人たちはいいのですが、そうでない人がかなり相当数いますよ、という現実が、僕が見てきている景色なので。このような中で全戸配布となった場合に、どちらにバランスを置くの

かなというのはある。割合的に動けますよという人がいるのは確か。それを今、先生がおっしゃったように、その事例を出す意味がどうあるのかな？一方で、避難所で寝ていて人を顎で使うような人がいるのも、それはそれでけしからんというのはわかるのですが、それ以上に助けられなくて、声を上げられないとか、性被害を受けているとか、いろいろな問題を僕は見てきているので。光が当たってない所に光を当てましょうという方がいいのかな。それはもしかしたら「東京防災」の方で、そうは言ってもしっかりと働いてもらいましょうね、という話なのか、

○中林委員長 働いている人が増えると、支えられたい目が届かない人に、対してアウトリーチもすごくかけやすくなりますし、そういった意味では、それは決して相反するものではなくて。社会全体を強くするために、支える力のある人が寝てしまったら、どうにもならないのです。でも、支えられる人で声を上げられない人は本当に厳しい人なのだと。在宅で、避難所にも行けない人ほど厳しいのだと。そういう知識はやはり必要で、そのためにはやはり、見守りだとか声かけだとか、何か気になった人いないか、とかというような仕事が必要になるということはおっしゃるとおりだと思います。そういう全体の目線みたいなものはある程度必要なのかな？

○鈴木委員 今中林先生がおっしゃった話からすると、僕、フィフティフィフティでないと言いましたが、もしかしたらフィフティフィフティなのかもしれないですね。書き方の問題としてね。

○鍵屋委員 それが共助。

○中林委員長 一つの言葉で言うとならば、地域ぐるみでみんなが生き延びるのですが、「外部から助けが来るのを待たないで、地域の中で力を出し合うことで生き延びられるのです」というところを、(たくさん読者が)共有できるようなメッセージとして(記載する)。では、あなたは何を助けて欲しいの？あなたは何を助けられるの？ということにみんなが気付いて、「これは助けて欲しいけど、これはできます」みたいな感じで。家族の中でもおじいちゃんはこのができないけど、家族と一緒にいたらトイレに連れていけるよね、みたいな話したとか。このように気づけるものをたくさん作ってもらう。それがファミリー単位とか、あるいは地域単位、近所単位で、避難所はまさに、近所のつぼなのですよ。そこで、近所付き合いがなければ、それぞれバラバラ烏合の衆で、まず声の大きい人が動いて行ってしまふ。もうそれは最悪の世界になる。そうではなくて、地域の中で、支援が必要な人ができることもあるし。共助ができる人も支援が必要なことはある。備蓄を何もしていないかもしれない。それで、おにぎりを分けてもらえるようになると思うし。そのようなグループみたいなことで、地域、みんなで助け合うことがこれからの東京防災では何よりも大事なのです。そういうことに気づくのが、マイブックで、家族を見直すことであり友達関係とか知人関係を見直すことでもあります。そのような大きいメッセージがやはり必要なのではないでしょうか？

○鍵屋委員 インバウンドの外国人とか、あるいは地方から出てきた人とか、まったく東京

都の土地勘がないわけですよね。そこで、地震が来たらどうしようもないよ、という人たちの中に、旅行されている方とか、外国の方とかでも、そういうことに気づけるようなコンテンツもあってほしいなど。ごく少しでいいので。自分の家族だけではなくて、ごく少しでいいから「今、この外国の人、きっと困っているよね。」と。市役所の避難所や学校に行くと、ネットワークが繋がりますよ、みたいなことを言ってあげられても。

○鈴木委員 これ多言語化はするのですよね。

○事務局 これまでの二冊は、四カ国語に翻訳しています。英語、中国語(繁)、中国語(簡)、韓国語。

○富川委員 多言語版は、自分で取りに行くスタイルなのでしたっけ？

○事務局 そうです。全戸配布は、日本語版だけだったので。今回も、まずは日本語版をデジタルで上げて、多言語版は後で翻訳する。

○中林委員長 「東京防災」で、マナーを、読んでもらって勉強してもらうことにもなるし、東京都ではこういうやり方しているのだから、私(外国人の方)たちもこうなのだ、と勉強してもらいやり方で、自らの行動も学ぶ。そうすると、さっき言った外国人は、助けられる人だけではないのですよ。

○鍵屋委員 デジタル版は、今はすごく変換が上手なので、デジタルの日本語のものだと多言語が容易。

○中林委員長 防災用語とかを、どこまできちんと翻訳してくれるか怪しいところがある。

○鍵屋委員 防災用語をなるべく使わない。でも、結構入っている。

○中島委員 私は取材をした内容を必ず入れるようにしているのですが、被災してしまったら、「①まず自分の安全を確認しましょう。②その安全が確認できたら、隣に居る人をどういうふうにするか、ということを考えましょう。そうすると人は一番賢い行動ができます。」と言うメッセージが過去にあった。このメッセージを素晴らしいなと思っていて、それを刻むようにしましょうというのを、一つの本を作るときのコンセプトにしているのですが、今お聞きした話、まさにそういうことかなと思ったのですよね。自分の安全がまず大事、そして隣にいる人が何か困っているのか、それが何かというのは、その人のケースになるわけなのですけれど、怪我してしまったのかもしれないし、障害があるのかもしれないし、例えば、子連れのお母さんがすごく困っていることかもしれない。例えば、電車の中で地震が起きて、閉じ込められてしまったみたいな時に、待ちの姿勢になってしまうと、何も行動を起こさない。自分が助けてもらう人だと思っていると、何の行動も起こせないのですけれど、隣の困っている人を助けるために、「では、私が地上に出られるかどうか、少し見てきます」とか、「何か持っている人がいるかどうか声をかけてみます」とか。そうすると、結果的に自分のことも助ける賢い行動が取れるようになる、能動的に動けるようになるという話があって。個人単位でできることとして、そういうことを心がけることが一番大事なことかなと思いました。そういうことで、こちら(東京くらし防災)の方は、そういう「隣の人を助ける。でもそれは、結果的に自分を助けることになる」ということを言えると実践

しやすくなる。自分たちで生き延びればよいという話ではない。それが結果的に自分を助けることにもなるのだよ。ということ宣言出来るのか？それは理想論に聞こえてしまうのかもしれないのですが、そこは、このような根っこがあると、多様性みたいな話とか、そういうことが自分事化するというか、どういう行動をしたらいいのかというのがわかってくるのかな、というのは、思ったりしました。まずは、そういうことを考えるというのが大切。

○中林委員長 「公助」ではなく、「近助」だね。

○中島委員 最小単位の最初にできることですね。

○中林委員長 東京は、そこが一番の弱点だね。

○中島委員 そうなのですよ。

○中林委員長 あまりにも、「我先に」という世界になってしまうと、我先にだけの、自助だけの感じになってしまって、その取り残しが出てしまう。

○中島委員 やはりうちの読者とかも、かなり単身者が多いので、そういう人が多いということも東京の特徴だと思うのですよね。そうすると地域とのつながりも全然ないし、もともとそういうことをしようという気もあまりない、という人もかなりの数いらっしゃるのではないかと思います。まずは、隣の人を助けられればいいのだな、みたいなことを考えるというか、自分だけが助かるわけではないのだよ、ということ言うのは、「東京」と銘打っているこの本では必要な考え方かなというふうに思います。

○中林委員長 マンション防災なんか、まさにその世界ですよ。

○鍵屋委員 まず、最初にすぐ隣にいる人を、ということね、感覚的にはすごくいい。

○富川委員 セキュリティの事情もあって、本当に難しいですよ。挨拶しない運動があるマンションがあるぐらい。

○鍵屋委員 挨拶しない運動！？

○富川委員 「知らない人には絶対あいさつしないでね」みたいな声かけがある。それを聞いた時に、災害時には本当に由々しき問題だな、と。逆に知っている顔が多いほど、メリットにもなるのにも関わらず、そういう事例が実際に東京だとあるのだな、というふうに。こちらからそうしましょう、そうしましょうと言っても、それこそやはり具体的にこうして記載しないと難しいだろうなと思った。

○中林委員長 防犯と防災が違うのです、という理由はまさにそこなのだろうね。

○富川委員 結果やはり、防犯と防災が一緒になる部分もあるのに、と毎回思うのですよね。

○中林委員長 そのため、災害の後は、防犯と防災を一体化させないと犯罪だらけになってしまう。隣が誰か、このマンションに住んでいる人をほとんど知らない、それが空き巣であるかもしれない。日常は、どういう人が住んでいるか分からないから、変に声をもかけないほうがいいよ。親しくしてくる人は実は危ない人かもしれないから。平時は、防犯なのですが、災害の時には空き巣かどうか見極めるために、この顔を見たことがある、それがどれだけいるかで（安全性も）変わるのですよね。そういう意味で防犯と防災は違うけれど、

その壁が乗り越えられるような。ご近所とか地域ぐるみとか、マンション防災はそれぞれ大家族なのです、共同体です、と。

○鍵屋委員 運命共同体なのですよね。

○中林委員長 そういうことも含めて。非常に具体的ではないのだけれど、大きい枠組みとしては大事なメッセージとして、どう見せていくのか、だんだん難しくなってきたけれども、意見としては、ほぼ出尽くしたような気もしないでもないのですが、そろそろ時間なのですから。

○事務局 少し補足させていただきます。世帯の話が出ましたが、東京では単身世帯が約50%。そのうち、60歳以上の単身世帯が約11%。それと、共同住宅という意味では、約七割です。

○富川委員 七割もいるのですね。

○中林委員長 今巨大マンションが増えているから、あつという間に増加するのです。マンション防災の方がノーマルですね。ターゲットをどういうふうにするか、という観点があるけれども、単身世帯が約50%ということは、フィフティフィフティということだよ。核家族と単身家族。私としてはこれ、核家族をベースにして、単身の人も一人家族として。それに若い人と一緒に住んでないけど、すごく大事な人がいたりして、そういう人の話も一緒に考えてもらったりしたい。単身なのだけれど、息子、孫の世代とのコミュニケーションも考えてみる。あるいはペットがいるから、実は私は二人です、という人も結構多いかもしれないです。そういうことを考えて、私の家族というのを作った上で、この本を開いて必要なことを吸収しながら自分事として考えていく。そういう赤本（東京くらし防災）とそれを奥深くいろいろと深掘りができるための「東京防災」。プロとかセミプロとか防災マニアにとってはこちら（東京くらし防災）よりもこちら（東京防災）の方が面白いかもしれない。でも、多くの人がこれ（東京くらし防災）から入ってもらうことで、こちら（東京防災）にもアプローチしやすい。そのようなコンセプトの二冊で編集していただく。大枠、よろしいでしょうか。

○事務局 ありがとうございます、最後に報告事項に移らせていただきます。

資料3、印刷と梱包について、事前説明のご案内のとおり、案内文と「東京くらし防災」と「東京防災」、また、都の重要な取組として、感心ブレーカーとマンション防災のリーフレットも同封して、セットでお送りしようと思っております。

資料4、配布方法について、第一段階から第三段階第まで分けており、第一段階で、まずは全世帯にポスティングをしていく、それで、どうしてもポスティングできない世帯がありますので、そういった世帯には、第二段階として不在票からコールセンターに連絡して再配達で受け取っていただこうと思います。第三段階と致しまして、配布完了以降の都内への転入者については、区市町村と連携して配布できるよう検討していきたいと思います。具体的な梱包のイメージや配布方法につきましては次回以降で、また改めて報告させていただければと思います。

正午閉会